寂聴
古寺巡礼
瀬戸内
寂聴
setouchi jakuchō

寂聴古寺巡礼

発行日　一九九四年二月十四日　初版第一刷

著　者　瀬戸内寂聴
発行者　下中　弘
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区三番町五番地　〒一〇二一
電話　東京〇三―三二六五―〇四六五〔編集〕
東京〇三―三二六五―〇四五五〔営業〕
振替　東京八―二九六三九
印　刷　株式会社　東京印書館
製　本　和田製本工業株式会社

©Jakucho Setouchi 1994 Printed in Japan
ISBN 4-582-82870-1
NDC分類番号915.6　四六判(19.4cm)　総ページ246

落丁・乱丁本のお取替えは小社読者サービス係りまで
直接お送りください（送料、小社負担）。

寂聴古寺巡礼

瀬戸内寂聴

setouchi jakuchō

平凡社

寂聽古寺巡礼　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神護寺　じんごじ　……9
常照皇寺　じょうしょうこうじ　……19
清涼寺　せいりょうじ　……31
天龍寺　てんりゅうじ　……47
仁和寺　にんなじ　……59
泉涌寺　せんにゅうじ　……71
黒谷と真如堂　くろだに と しんにょどう　……83
永観堂　えいかんどう　……93
三千院　さんぜんいん　……101
平等院　びょうどういん　……117
秋篠寺　あきしのでら　……129

薬師寺　やくしじ……139
唐招提寺　とうしょうだいじ……151
橘寺・岡寺　たちばなでら・おかでら……161
延暦寺　えんりゃくじ……175
三井寺　みいでら……187
石山寺　いしやまでら……203
石塔寺　いしどうじ……217
渡岸寺［向源寺］　どうがんじ［こうげんじ］……227
寂聴古寺巡礼ガイド……239

装幀　菊地信義

寂聴古寺巡礼

神護寺　じんごじ

寺はうんと壮大な寺か、思いきってささやかな草庵風の寺がいい。

私は昔から高雄（たかお）の神護寺が大好きだ。神護寺の場合にかぎって、私はなぜか「高雄の神護寺」と、場所もいっしょに口にしてしまうのは何故だろうか。

高雄は人も知る紅葉の名所で、京都でもそれは有数の景観として珍重されている。秋の錦繡の頃の目のさめるような鮮やかな高雄もいいが、まるで楓の一葉一葉から翡翠色の雫がふりこぼれ、精妙な音楽がかなでられてくるような、瑞々しい新緑の高雄もまた心身を洗われる観がある。

新緑に先だつ花の季節も、美しいが、雪の降りしきる厳寒の高雄は、人気（ひとけ）もなく清浄で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その広い境内にひとり立つと、全く浮世濁世から脱出して、別世界にたどりついたという厳粛な感動に身がひきしまるのを覚える。要するに私は四季のあらゆる季節の高雄の神護寺に惹かれてそこを訪れていることになる。それでも四季の最良の時を一つあげよといわれると、私はためらいなく雪の神護寺を推す。寺はすべて厳冬に詣ることが最良かもしれない。信仰心が薄れ、一種の行楽として、あるいは観光の対象として訪れることが多くなった此頃では、季節のいい時は名刹ほど観光客で賑っていて、静寂は失われている。

雪の高雄山は行楽時には人であふれていた清滝川（きよたきがわ）ぞいの茶店や料亭もひっそりと戸を閉ざし、その屋根も露台も、しまい忘れた床几の上にも雪が降りつもり荘厳されている。

丹塗の清滝橋も銀雪におおわれ、硝子の橋を渡るような緊張感を覚えさせられ身がひきしまる。

清滝川が聖域の結界の役目をしている。橋を渡りきると、幅の広いゆったりとした石段が、三百数十段も誘いこむようにつづいている。石段の右側にわが国最古の下乗石がある。正安元（一二九九）年の銘がある。

歳月に磨滅したゆるやかな石段は、延々とつづいている。青葉も、紅葉も、裸木の雪の花も、その都度、石段に屋根のようにかぶさって、疲れをなだめてくれる。

途中に空海の伝説の硯石がある。五月雨で川の水かさが増し、勅使が渡れなかった時、空海がこの硯石で墨を磨り、川向うの額立石に額をたてかけ、勅命の額の字を筆を投げかけて書いたという伝説である。当然、空海の天才的能筆から生まれた虚構の伝説にすぎないが、伝説には人々の願望と祈りがこめられていて、真偽を問うなどは野暮な話であろう。

石段を登りつめると、どっしりと楼門がそそりたち悠然と見下している。翼を開げた巨鳥のようなこの楼門も、その奥の広々とした境内も、のどやかな配置で建っている堂塔も、すべておおらかで壮大で、そこに佇っただけで心が開けてくるような気がする。

山門には覚深法親王の筆になる「神護国祚真言寺」という寺名があがっている。舌を嚙むようなこの寺の本名を私は覚えきれないし、覚えたくもない。高雄の神護寺で充分だ。更にそれ以前の高尾山寺という呼名がなつかしい。

山門を入ってすぐ右側に和気清麻呂の霊廟がある。墓は山の上方に別にある。

和気清麻呂は、孝謙天皇が重祚して称徳天皇となられ、寵愛されていた道鏡を皇位につけようとする問題のおきた時、清麻呂が宇佐八幡の神託と称して、道鏡天皇の誕生を防止した。この件で清麻呂と姉の広虫は流罪にあい、称徳女帝はそれから一年後に崩御になり、道鏡は下野薬師寺別当として左遷され、清麻呂は都へ召還される。翌年道鏡も女帝の後を追うよう

に死んでいる。清麻呂は宇佐八幡から一寺を建立し、万代安穏を祈願せよとの神託を得たといって、桓武天皇の許可を得て「神願寺」を建立していた。その真意は、道鏡の祟りを恐れての怨霊鎮魂のためが目的であっただろう。

桓武天皇もまた、皇太子であった早良親王と、伊予親王と母吉子を殺している。やはり天皇の内心には無実の罪で死に至らしめた彼等の怨霊におびえるところがあった。

桓武天皇の長岡遷都にも平安遷都にも、側近として常に遷都推進の役を引き受けていた清麻呂は、桓武天皇に重く用いられていた。南都仏教に対抗する新仏教を待ち望んでいた天皇に、篤実な青年僧最澄を推挙したのも清麻呂であった。清麻呂は早くから最澄の大器を見抜き、積極的な外護者となっていた。

清麻呂が、延暦十八（七九九）年、六十七歳で歿した時、墓所を高雄山寺に造った。和気氏の菩提寺としての性格がこの時はっきりする。清麻呂の死後、長男弘世も五男真綱も、父の遺志をつぎ最澄の外護者の役をつとめた。

最澄にとって高雄山寺は生涯の明暗のクライマックスを示す劇的舞台となっている。

延暦二十一（八〇二）年、弘世の招待で、最澄は高雄山寺で法華経を講演した。名目は弘世の伯母広虫の三回忌の法要であった。この法会には南都の大徳も朝野の貴人や学匠たちも

こぞって参列し、聴聞した。最澄は十七年にも、二十年にも、比叡山で法華十講を講演しているが、それはいわば、自分の寺内での催しで、高雄山寺という和気氏の菩提寺で行うことは対外的に派手なキャンペーンになる。しかもこの講義は大成功裡に終り、最澄の名声はとみに上った。

弘世の背後には桓武天皇の外護もまた大きく与ったとみていいだろう。天皇は南都の旧仏教を圧える新しい仏教として最澄の天台宗を期待を以て認めることになる。その翌年、天台教学の完全を目ざして一年間、還学生として入唐するチャンスも摑むことが出来た。

唐から帰ってきた最澄を待っていたのは、この一年間ですっかり体力が衰え病気が重くなった桓武天皇だった。最澄は唐からの帰り、ほんの少しの余暇を利用して越州へ寄り、一ヶ月ほどで密教を学び、龍興寺の順暁に、金剛界と、胎蔵界の灌頂を受けてきた。

桓武天皇はそれを知ると、予想以上に喜び早速、弘世に命じて諸寺の大徳を選び最澄から灌頂三昧耶を受けるべしと命じられた。最澄は病帝の異常なほどの密教への執着に、その呪法にすがって怨霊を退散させたいという悲願がこめられていると知っていただろうか。

自分でもあっ気に取られるような華々しさで迎えられ、勅命もだし難く、高雄山寺でわが国初の密教の灌頂を奈良の高僧八人に対してほどこしてしまった。引きつづき、天皇のため

にも城西の郊の野寺で灌頂を行っている。しかし、病帝の期待は裏切られ、折角の灌頂も役にたたず、それから七ヶ月後に桓武天皇は崩御した。ただし、死の三月前に、最澄に対して天台法華宗開立を公認するという大変な置土産をしていった。

最澄と共に入唐し、少しおくれて帰ってきた空海こそ、長安の青龍寺で密教の正統の灌頂を恵果から受けて来た。入唐の時は、最澄に比べて名もない僧で二十年の留学期間の義務を課された留学生であったが、空海は二十年間に費う費用をわずか一年半で費い果たし、おびただしい経典や仏具や仏画の類を持ち帰った。

その後三年ほど身をひそめていた後、朝廷の要請ではじめて京へ帰る。京へ帰った空海に提供されたのが高雄山寺であった。

和気氏はこの時弘世はすでに世を去り、弟の真綱の代になっていた。この時は空海の持ちかえった請来目録が都では大評判になっていた。最澄はそれを見て、自分の密教の智識が如何に貧弱なものかを識る。性格の素直で稀に見るほど高潔な最澄は、そうとわかると、現在の身分の上下にこだわらず、はるかに身分の低い空海に、弟子の礼をとって教えを請うのだった。

現在神護寺には、空海の字で書いた「灌頂歴名」が残っている。メモ風に書きとばしたも

のなので飾らない空海の濶達な字が躍っていて、空海の肉声を聞くような感じがする。弘仁三（八一二）年十一月十五日に、空海から金剛界の灌頂を受けた最澄の名が冒頭に見える。そしてこの歴名の中には泰範（たいはん）の名もある。泰範は最澄の最も愛した秘蔵弟子で、灌頂を受けた後も高雄山寺に残して、空海の許で修行するよう最澄がはかってやったところ、泰範はすっかり空海に傾倒して、高雄山寺から最澄の許には帰らず、最澄がこの哀れな老僧を捨てないでくれなどという無残な手紙を出しても、一向に心を動かさないばかりか、最後は空海が代筆して、徹底的に冷酷で残酷な絶縁状を出すという最悪の事態をまねいてしまった。

かつて、あの栄光に包まれた晴れの舞台だった高雄山寺が、最澄にとっては、屈辱と不幸をもたらす場としてたちふさがったのだった。最澄は弟子の礼をとり、空海からあきれるばかり経典を借り出していた。空海はまた信じられないほど寛大にそれを貸しつづけていた。しかし最後に最澄が真言密教にとって最も大切な、「理趣経」釈の借覧を申しこんだのに対しては、きっぱりと拒絶し、それはまた絶交状ともなった。平安初期に同時代にあらわれた二人の宗教的天才は、所詮、相入れぬ資質と個性を持っていた。

空海は、弘仁十三（八二二）年、高雄山寺で平城（へいぜい）、嵯峨の両上皇に灌頂を授けている。この年最澄は歿し、死を代償として、かねて念願の比叡山戒壇の勅許を受けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com